

碩心

社団法人 日本詩吟学院 岳風会 認可
 神奈川 碩心 会 発行

9年10月現在 逗葉大(合)	9年10月 発行 加編中	303号) 行者 相者 愛
地区区計	藤村	岳岳
146名		
213名		
37名		
396名		

予定行事

- 葉山町文化祭オープニングセレモニー
 日時・11月1日(土)午後1時より
 会場・葉山文化会館大ホール
 (詩舞二題・合吟二題参加)
- 逗子市文化祭・詩吟詩舞発表会
 日時・11月2日(日)9時より
 会場・逗子図書館ホール
- 葉山町文化祭・詩吟詩舞発表会
 日時・11月9日(日)10時より
 会場・葉山文化会館大ホール
 (今年もマジシャンズ倶楽部と共催)
- 県本部高段者吟法講座
 日時・11月23日(祝)9時～9時半
 会場・平塚農業会館
 講習料千五百円は前納。吟道手帳、
 審査課題テキスト持参。弁当は自前。
- 碩心会葉山地区温習会
 日時・11月23日(祝)10時より
 会場・葉山文化会館大ホール
- 県本部最終理事会・納吟会
 日時・11月29日(土)
 会場・平塚農業会館

第109回全国吟道大会参加

北海道吟行会募集について

吟道大会日・平成10年10月4日(日)
 大会会場・北海道厚生年金ホール(札幌)
 日程コース・三泊四日の予定
 参加希望者・9年9月30日(火)迄に人数を
 県本部企画部へ連絡
 出吟割当・神奈川地区 150名
 概算積立額・一人十万円(出吟料二万円含)
 積立開始・第一回目平成9年10月予定
 その他・旅行代金及び旅行行程等につ
 いては決定次第各会長宛に文
 書をもって連絡
 問い合わせ先・企画部長 赤羽岳頌
 ☎〇四六八一二三一一八六六
 (碩心会より左記参加) 28名

千葉岳関 沼田岳雷 中村岳愛 岩崎岳恵
 鈴木岳抄 杉山岳雪 山口岳夕 大石春岳
 佐藤湧岳 矢嶋岳悦 村田岳瀨 白井岳麗
 上村象岳 長島玉岳 安田聡岳 石月翹岳
 松井正岳 白井照岳 鈴木江岳 鈴木千岳
 石川響風 岸田浩風 川瀬慧山 斉藤和風
 押山照風 村上雍風 大西雄泉 前野令風

9月21日(日)逗子図書館に於て、碩心会秋期審査会が行なわれ、全員合格。伝位合格者は左記の通りです。益々の御精進を。

昇伝認許 (9・10・1日付)

おめでとうございます。

(初 伝)

- 423 鈴木 幸子(聰泉) 429 鈴木 裕子(笙泉)
431 長谷川末子(瑛泉) 432 有馬 昌子(昌泉)
433 平野千鶴子(鶴泉) 435 小島 和三(和泉)
443 鈴木嘉代子(響泉) 449 有友 嘉紀(嘉泉)
450 福田喜枝子(喜泉) 451 高田 君子(君泉)
453 鈴木 豊子(豊泉)

(中 伝)

- 359 屋比久 三喜子(喜山) 365 沼田 厚子(厚山)
382 海藤喜代子(喜山) 383 高館 浩(弘山)
384 齊須 淳子(淳山) 385 嶋山まゆみ(真山)
389 石川 吉江(吉山) 390 高橋とも子(友山)
391 葉山 敏子(敏山) 393 渡辺 英子(英山)
394 赤坂はるお(春山) 422 稲村 義雄(雄山)
(奥 伝)
303 風間ケイ子(恵風) 306 矢島 文子(綾風)
307 矢島百合子(容風) 308 二戸部 武(勝風)
(番号は名簿番号)

審査講評の中から

- 基本的な自分のもっている音声で吟ずる。
 - 呼吸法について。腹式呼吸をしっかりと吟題をいったあと、息をいっぱい吸いこみ、吐く時に吟じはじめる。
 - 余韻は(母音)でのぼす。
 - 雨降りのせいもあってか、全体的に少し元気がなかった。
 - 口を大きくあけ、口のひらきを正確に、大きな声を出す。
 - 五言のおとしをしつかり練習すること。
 - 詩吟は大きな声で。女性の方は全体的にもう少し高く。
 - 吟じ出し、二句三息が大事。
 - 姿勢は大体よかった。足は少しひらき、手はかるくにぎり、目は八分、あごをひく。
 - 和歌：こまぎれにやった人がいて、余韻が短かった。
 - 全体的に節調はよかった。
- (総 評)
- 全体的に迫力がなかった。発声法を勉強し、力の入った吟をやってほしい。

六十の手習い

悠吟 高館 弘山

戦前戦後を通して私なりに波瀾万丈の人生を送った末、66才で現役をリタイヤして間もなく、縁あって詩吟教室に入れて戴き、従来無縁だった地元の方々との親しいお付き合いの機会を得てから3年余、去る9月の審査会で「山」のお仲間入りすることが出来ました。審査会当日は生憎の雨のため、応援の人達もあまり見えませんでした。私の審査会場はホールで、昔は人前で挨拶や講演の経験はあっても、やはり大会場での試験となると大いに緊張致しました。

声を出すことが好きで「歌」とか「唄」と名のつくものはひと通りかじってききましたが、詩吟だけは耳にはしても自分で吟じたことは皆無で、余生にこの道に入れたことは私にとって大きな生き甲斐を得たと喜び且つ感謝しています。諸先生先輩の吟詠を拝聴するたびに我が吟詠の未だ遙か及ばざることを知らされますが、健康で声の出る限り今後何段(何才)迄達することが出来るか、自ら興味を持って挑戦を続けて行きたいと思っています。

吟詠のはじまり

現代の吟詠法は、江戸時代末頃、九州の広瀬淡窓^{セダシヅ}という儒者が「桂林荘」という、今でいう全寮制の私塾を開き、遠い地方から離れて来ている門人たちを少しでも元気づけようとして、手作りの竹の楽器などを叩きながら全員が一緒になつて節をつけて吟じ合つたのが最初とされています。この塾生たちが学業を終えて郷里に帰りひろめたのが源流ともいわれているわけです。

こういう話も伝わっています。広瀬淡窓の私塾「威宜園」（桂林荘が改名）の入学式には、講堂で新旧学生の紹介が行われ、その際淡窓の作品「桂林荘雜詠諸生に示すその1」（1/31頁）が吟じられたということです。

道うことを休めよ他郷 苦辛多しと

同袍友あり 自ら相親しむ

柴扉曉に出ずれば 霜雪の如し

君は川流を汲め 我は薪を拾わん

（他郷での勉強は苦しくつらいと弱音を吐かないことにしよう。ここでは一枚の衣類も貸し合い、切磋する友人たちがいるじやないか。朝起き出せば寒い霜の朝だけれども、さア君

は水を汲んでくれ、俺は薪を拾ってきて、飯を炊こう。そして一緒に貧しくとも暖かい食事を囲もうではないか。（袍は綿入れ、どてら。同袍は寝具を貸し合う友人）

この話は、現在でいう「寮歌」のように、入学式やコンパなどがあるたびに吟じられたようです。淡窓の私塾は九州日田（大分県日田市）にありました。ここは山間の盆地でしたが、当時は日田代官所の所在地であり、長崎への道筋にもなつていたことから、各藩の者たちが集まり、全国六十四ヶ国から前後合わせて約五千人近くの人々がその門を叩いたといわれています。その中には、高野長英、大村益次郎等の人材が数多く輩出しました。

明治維新時代は、尊王の志士だけでなく幕府方の武士も、地方の郷士の息子たちなど若者が集まれば、まず詩を吟じ合つたようです。この気風は明治中期まで続き、漢詩を作ることに、吟ずることなど漢文的素養は、学問教養の大きな要素であつたことは、夏目漱石、森鷗外、永井荷風、正岡子規ら多くの文人が漢詩を残していることでもはつきりしています。

日本詩吟学院岳風会編

「詩吟健康法のすすめ」より

新田治子訳

漢詩和歌訳名詩選（秋の詩より）

（秋日友人に別る）巨勢 識 人

林葉翩翩秋日曠

行人独り向こう辺山の雲

唯だ余す天際孤懸の月

万里流光遠く君を送る

木の葉舞ふ 夕暮を一人 旅立ちし

友を想へり月冴ゆる夜半

（武野の晴月） 林 羅 山

武陵の秋色月嬋娟

曠野平原晴れて快然

青青を輾破し轍迹無く

一輪千里草天に連る

まだかなる 月上りきて 武蔵野の

草原遠く 天につづけり

（晚秋舟行） 市川 寛 斎

晴江秋静かにして天を涵す

岸を夾みて霜楓晚煙に焼く

漁唱樵歌都て去り尽くし

詩を思いて人は在り夕陽の船に

船歌も 木こりの歌声も しづまれば

岸辺の楓に 夕日うつりぬ

徳富蘆花「自然と人生」

逗子滞在で心機一転

「自然と人生」は散文風の随筆八十七編と小説一編、論説文一編を一つにまとめたものである。蘆花自身は、この本の紹介文で「自然を主（あるじ）とし、人間を客とせる」もので、「水彩の画」ともいふべきものであるといっている。漢語や漢文をみずみずしく駆使した名文で、一時代の文章の手本とも評された。

逗子滞在中の明治三十一（一八九八）年元日から大みそかまで一日も欠かさず書き続け、書き終えたものは片はしから兄蘇峰の経営する民友社へ送って連載され、明治三十三年には刊行されている。

今までの蘆花とは違い、毛筆でなくペン書きで洋紙に執筆するなど、心機一転新しい境地を生み出すかのようであった。

こうした自然を観察して日記を書くことを始めたのは、国木田独歩の間接的アドバイスらしい。

蘆花は明治三十年から三十三年まで足かけ四年間逗子の柳屋に間借りして生活したが、

その柳屋とは以前、独歩がいて彼の影響をうけたものらしい。

逗子に転居したころの蘆花は、父や兄や家や自我の葛藤（かっとう）など日々悩み多き時期であり、この悩みを解消すべく逗子の自然の恵みに触れ、徐々に自然の中に神の存在を見いだし、自然観を中心とした生き方をとるようになっていった。

こうしたなかで書かれたのがこの「自然と人生」である。蘆花の代表作「不如帰」とともに蘆花の出世作の一つである。

この中で蘆花は自然の素晴らしさを見事に表現している。「此頃の富士の曙」では「心あらん人に見せたきは此頃の富士の曙、午前六時過、試みに逗子の濱に立つて望め、眼前には水蒸気渦まく相模灘を見む。……」と逗子の自然を取り上げる。

（中里行雄・三浦半島文学巡りより）

徳富蘆花（一八六八—一九二七）

熊本県生まれ。「不如帰」で作家としての地位を確立。逗子郷土資料館（旧徳川家達公爵別荘）には、蘆花・独歩をはじめ逗子ゆかりの文学者の資料や郷土資料が展示、紹介されている。

稽古風景

（母の心・²/₆₆頁）

炎熱の夏は去りて秋風来たる……の九月のお稽古日に、これまた逗子に縁の深い、大野孤山先生作の「母の心」を勉強しました。

この詩の内容は、昭和22年7月、故松井岳洋先生が、遠縁の子供を、その母親が病氣のためあずかっていたところ、或る日遊びに行つたまま行方不明となつた。当時ラジオ、新聞等で広く報道され、数日後無事に戻つてきたという実話をもとに大野先生が作詞されたといわれます。詩文の内容もわかりやすく、「舟艇守の尺八」共々、身近な逗子の物語りに、皆さん親近感をいだかれたようです。

（支部移籍）

180 人見海風 銀詠より悠吟支部へ

（入 会）

481 新井瑞風(再) 平塚市明石町二五—一一—304
（真澄） ☎〇四六三—二—五五六九

（退 会）

186 宮田花風（若 葉）319 渡辺麗山（真 澄）
387 星野寿泉（吟 秀）411 堤 五三（唐木山）
462 角田照泉（悠 吟）